

Rare sheep



Manx Loghtan

NO. 6



## 目 次

マンクス・ロフトンの繁殖計画 (3) .....	正田 陽一	1
羊飼いの犬 (お宅のポチも牧羊犬) .....	工藤 悟	2
マンクス・ロフトンの登録 .....	工藤 悟	4
新しいレア・シープ ボールウェン .....	百瀬 正香	4
レア・ブリードを純粹に維持していくということは .....	百瀬 正香	5
自己紹介 .....		8
誌上ギャラリー .....	堀内 眞里・佐藤しおり	9
フェルト制作について .....	下山里香子	10
羊と共に生きる .....	高橋 徳行	11
家畜羊の祖先を探る (下) .....	正田 陽一	12
前号での『提案』に対する手紙と電話 .....		14
海外トピックス・新会員紹介・編集後記 .....		15

表紙イラスト●笠原哲郎

編集協力●小国 徹 工藤聖美 佐藤しおり 堀内眞里

## マンクス・ロフタンの繁殖計画 (3)

正田 陽一

マンクス・ロフタンにはホワイト・マーキング(白徴)を持つものがしばしば現れます。またスプリット・アイリッドという眼瞼が裂けて完全には眼を閉じられない遺伝的欠陥を持つ固体もかなりの率で見られます。このような望ましくない遺伝形質を保有する固体をどのように取扱うか? 選抜と淘汰の問題が第3の問題点です。

ホワイト・マーキングは、英国の登録協会では登録を認めていません。白徴をもつ個体、つまり両親から白徴の遺伝子(劣性)を受け継いでホモになった個体は、繁殖群から淘汰され次代を残さないで、白徴遺伝子の頻度は減って行きます。しかし、両親(これは劣性遺伝子をヘテロに隠し持っていることは確実なのですが……)は淘汰されないのですから、その減少のスピードはそれほど速いものではありません。(白徴の遺伝については会報2号4~5頁を参照して下さい。)

経済動物である家畜においては、この淘汰を厳しく行うことが、生産能力の遺伝的改良のために必要ですから、遺伝子をヘテロに持つことが判明した場合 — 子供の表現形にその劣性形質が現れた場合には — 両親も淘汰するのが普通です。

しかし、種または品種の保存を考える立場に立つと、問題は全く変わってきます。前号でも述べたように、ファウンダーの持つ遺伝的多様性をなるべく失わないようにすること、そしてそれぞれの遺伝子頻度を可能な限り変化させないようにすることが大切なのです。

したがって特定の型質について淘汰を加えることは、例えそれが飼育者にとって望ましくない形質であっても、その形質の遺伝子と連関する遺伝子(同一染色体上の近い位置に座位する遺伝子)をも淘汰することになり、遺伝的に大きな変化を巻き起こすことになるので危険です。

最近の動物園でも「種の保存」と言うことが社会的役割の一つとして注目されるようになってきました。野生動物種ばかりではありません。ヨーロッパの動物園では家畜の稀少品種の保存にも力を入れています。レア・シープのヤコブ種、カラクール種などが飼われている動物園は各地に見られます。これらの施設では決して人為的な淘汰を行うことはありません。繁殖群が小さくなること、後代に対しての血縁占有度が偏ること、のふたつを防ぐことが一番大切な課題だからです。

集団の遺伝管理を考えると、このどちらの立場に立つかを定めることが、まず肝心です。両者の間の妥協策というものは無いのです。しかし現実の問題として、白徴が出ると英国の登録は受けられないし、飼育する群の毛色の不斉 — ということもあまり嬉しいことではありません。

私は会報2号でC. E. Whiteway氏が主張しているように、淘汰はすべきでないと考えます。その場合英国の登録協会とは考え方を異にするわけですが、登録できる団体だけを登録し、国内では別の遺伝管理を行う必要があるでしょう。そして、近親交配を極力避けて、劣性形質である白徴が表現型に現れることを押さえていくことが、適当な策であると思います。

## 羊飼いの犬 お宅のポチも牧羊犬

工藤 悟

牧羊犬と聞いてどんな犬を思い浮かべますか。ほとんどの人が犬種名の中に『シープ』とか『シープドック』が入っている犬を思い浮かべるのでしょうか？ この様な犬たちにその名が付けられた時代には、恐らく羊を追っていたのでしょう。しかし、今では愛玩犬となっているものが大半を占めています。羊を追いかける仕事は今も昔も変わっていないはずなのですが…。より優れた牧羊犬へと品種改良されたり、流行に左右され、現在では、『ボーダーコリー』が代表的な牧羊犬です。しかし、最近彼等も、もう時代遅れと聞き驚いています。

私は牧場に入社して、初めて『ボーダーコリー』と出会い、数頭の犬を訓練してきましたが、ニュージーランドやオーストラリアなどを代表とする牧羊国で行われている牧羊犬の訓練とは、比較できないほどの低い次元のものです。しかし、その程度の訓練だけの犬でも羊の仕事をする時には、いなくてはならない存在です。

例えば、羊を畜舎から広い放牧地へ移動させる時、放牧地で自由に草を食べさせる時、群れを分ける時などで、特に羊を移動させる上では人間数人分の仕事をしてくれます。

畜産関係者でなくても、犬が好きで羊も好きな人でしたら広い牧草地で犬と一緒に羊を追いかけてみたいと思うことでしょう。

それではあなたの愛犬ポチは牧羊犬になれるでしょうか？

一つ、牧羊犬の仕事は実にきついものです。一人前の彼等は一頭で約600頭の羊を誘導出来ると言われています。この場合、600頭の羊の回りを走る事になります。少なくとも牧羊犬は羊の2倍の距離を走らなければなりません。体力が必要です。

二つ、羊はたいへん臆病な動物ですが中には牧羊犬に向かって来るものや、無視するものがあります。この様な手の掛かる羊に立ち向かう事ができる気の強さが必要です。

三つ、行き先を見失い不安になっている状態の羊を誘導するには、羊を驚かせない様にゆっくりとした動作で近付きます。即ち、落ち着きが必要です。

これら三つが、絶対条件です。忘れていましたが、羊を見て逃げたり、興味を示さない犬は残念ですが諦めましょう。

三つの条件を満たした犬は次の牧羊犬としての訓練に入ります。

犬を一人前の牧羊犬にするには、早くても半年、遅くても一年位掛かり、これは上記したような、その犬が生まれつき持つ素質に左右されると言う事はいうまでもありません。

まず、初歩の訓練（『マテ』『オイデ』『スワレ』『ヨシ』など）を徹底的に教えます。お互い根気が必要です。これを、完璧にマスターし、初めて実際に羊を追う訓練に入るわけです。

訓練が進むにつれ、徐々に個々の性格が、その行動に現れてきます。例えば羊の群の追い方では、その回りを走る犬、中へと入り込む犬、群に向かって吠える犬など。これらを早めに見極め、その性格を利用する事により、後の訓練を容易にさえ出来るのです。

さて、ここで忘れてならないことがあります。犬の実践練習の前に、羊たちを訓練しなければなりません。牧羊犬に慣れている羊ならば良いのですが、追われた事のない羊たちはパニックを起こすか、全く誘導に従わない事でしょう。無視されると言う事は、犬にとっても、おもしろくないどころか、自信を喪失させ兼ねません。

ここまでが訓練の前半であり、その成果は、人間側の指導力に左右されるものではないと思いますが、後半の訓練は実践になります。つまり、人間の指示で犬が動き羊を誘導する訳ですから、次のポイントは人間の判断力なのです。羊の性質、群の動き方を十分理解し、その場その場に応じた適格な判断がなによりも大切なことになります。例えば、羊の群の方向を曲げる時にいつ犬を前方に動かすか。群がどの位の長さになったら縮めるのか。群を二つに分けるとき、どこに犬を入れるか。群が複数に分かれたら、どこから追い立てるのか。その時々判断が羊の誘導を大きく左右してしまいます。そもそも、牧羊犬は自分で判断し羊たちを誘導する能力がありますが、その能力を生かすも殺すも指示を出す人間の責任です。これこそ、場数を踏むことが必要で、さしずめ、人間の訓練ともいうべきものでしょうか。

最後のポイントは、犬と、人間のコンビネーションです。イギリスで行われている牧羊犬の能力を競う大会は、定められたコース通りに数頭の羊を誘導するもので、実際の作業での誘導とは少し違いますが、牧羊犬と人間のチームワークで勝利を得るのです。つまり、たとえ、一流の牧羊犬を使ったとしても適格な指示が出せなければ良い仕事は出来ません。逆に一流でなくとも初歩的な訓練が十分出来た犬ならば、適材適所で、羊を誘導することも容易な事なのです。

訓練上の補足として… 私の場合、羊を誘導するとき、牧羊犬に出す言葉は『マテ』『マエ』『オイデ』『ヨシ』『スワレ』の5つだけです。また、これらの言葉と伴に手による合図を付け加えるとより便利になります。牧羊国では主に笛を使っている所が多い様です。笛にしても手による指示も回りに人が居る時や、距離が離れている時などに有利になります。私の職場では観光目的の牧場である為、周りには見物人がたくさん居る訳です。特に子供達は一緒になって名前を呼んだり、指示の言葉を真似するので、動作と言葉の使い分けが必要になります。ベテランの牧羊犬になると声を聞き分けますが、若いものは迷ってしまうことが時々あって、声を使わない指示が必要となり、益々、自分と、犬との関係を確実なものにしておかなくてはなりません。

ここまでくればもう一人前の牧羊犬です。しかし、訓練には終わりがありません。毎日、羊を追う事が訓練です。一つでも多くの事を牧羊犬に教えていきます。年を取り、リタイアした老犬にも必要です。例えば離乳前の子羊を追わせたり…。無理のない、大事な仕事を与え続ける事が長生きの秘訣であり、羊飼いの義務だと思っています。

実際はほとんどの人が羊を追わせる機会に出会わないでしょう。しかし、訓練の初歩は牧羊犬として改良されてきた犬種でなくとも十分できることです。頑張って牧羊犬に近づけてみて下さい。確かな主従関係で結ばれたあなたとポチの間には、もう鉄の鎖はいらないはずです。

## マンクス・ロフトンの登録

工藤 悟

平成5年度のマンクス・ロフトンの登録を行いましたのでご報告いたします。  
R. B. S. T. への登録頭数は、16頭（牝・10頭、♂・6頭）でした。内訳は次の表の通りです。

	生年月日	性別	父No	母No		生年月日	性別	父No	母No
百瀬	4 / 1 1	オス	3964	3866	本間	4 / 4	オス	3999	3902
	4 / 1 3	メス	3964	3418		4 / 4	オス	3999	3902
	4 / 1 4	オス	3964	3985		4 / 1 9	メス	3999	3898
本庄	5 / 1 2	オス	4895	3716	4 / 1 9	オス	3999	3898	
	5 / 1 2	オス	4895	3716	4 / 1 5	メス	3999	3319	
	5 / 1 0	メス	4895	3921	4 / 1 5	メス	3999	3319	
	5 / 1 0	オス	4895	3921	3 / 3 0	メス	3999	4899	
	5 / 1 7	オス	4895	3867	富士	3 / 3 1	オス	3473	4900

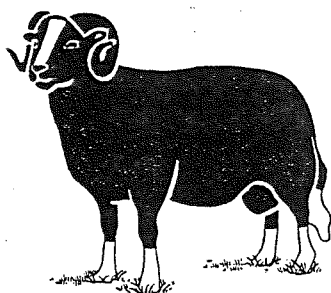
追記；種雄の交換を行いましたのでお知らせいたします。

9月上旬に本間さんの3999（ロメオ）と本庄さんの3891（キーン）を交換。

10月下旬に百瀬さんの3964（トフィー）とまかいの牧場の3516（ハロルド）を交換。

また、今回は富士サファリ・パークでの交配は行われないとのことです。

### 新しいレア・シープ・ボールウェン



（種の登録簿の表紙より）

ここ数年変動のなかった英国のレア・シープに新しい仲間が加わりました。その名前はボールウェン・シープ。これで英国のレア・シープは19種となりました。この羊はウエルシュ・マウンテンの系統です。それからでも分かるように、故郷はウエルズ。その中央を流れるツイ川の流域に限られていました。現在もそう広域に飼育されておらず、ウエルズ全土とわずかその周りだけです。

白いウールに価値があり、皆が競って白いウールに羊を選別していた時代でも、ウエルズの農夫たちは、この地の悪天候に耐えられる羊をと、ウールの色など気にも留めずに飼育してきた結果、ウエルシュ・マウンテン種は「カラー遺伝子の多様性」を失わず、カラフルな羊を生み出してきました。このボールウェンもその特性を伝承し、全体は黒、あるいはダーク・ブラウン、またはダーク・グレイに覆われ、額から鼻（鼻頭は黒）、膝から下の脚、下部半分の尻尾が白（H. S. I 紋様）というかなり目に付く紋様です。オスのみ有角。ウールはかなり粗毛です。

レア・ブリードを純粹に  
維持していくということは……

百瀬 正香

大層な題を掲げましたが、動物、畜産、遺伝などに関する基礎的知識のない者が「遺伝子とは、純血種は何を規準としてとらえるか」などと考えると狭義的になりやすく、とんでもない大きな落とし穴にはまってしまうという事を最近つくづく感じます。（これは自戒を込めてです）

今年、『アーク』（レア・ブリード・サバイバル・トラスト（以後トラストとのみ表記）の月刊紙）の5月号にP・ジュエル教授（動物生理学者でありトラストの評議委員。日本のマンクスを選別して下さった方。）はレア・ブリードの特性を維持し、保護していくためのトラストの方針に付いて、今話題となっている種を1つずつ具体的にとり挙げ、問題を提起しています。私はその中に私たちに於いても関わりの深い、いくつかの問題点を感じました。牛や豚のことはさておいて、羊のこと、特にマンクス・ロフタンに関わることを少し要約してみます。

「自然界では50/50の割合でソーエイのメスは無角だというのに、ここ数年ショウ&セール（トラスト主催で毎年一回開催される）ではたった1頭しか無角のメスを見なかった。それと同じようなことがマンクス・ロフタンのオスにもいえ、近年4本角が減少してきている。ポートランド・シープも最近、ダウン種化してきたとし『伝承によるタイプとは』で、ホットな論議を引き起こしたばかりである。

マンクス・ロフタンに話を戻せば、1年ほど前、マン島のブリーダズ協会から英国のトラストに『ロフタンは4本角を維持していかななくてはならない』という感動的な抗議文が寄せられた。マン島のマンクス種は外界から孤立し、伝統的な羊としてプライドをもって維持されてきた種であり、その歴史は完全な調査によって汲まなく記録されており、コマーシャルでは必要とされないけれど価値あるカラードウールを持っている種である。最近の飼育者は4本角は管理上難しいと、それだけで選別する傾向があるが、シンメトリーに正しい位置で四本の角が生えているオスは、他に何等かの欠点があったとしても、正しい遺伝子を持った形態の良いメスを掛け合わせたら最高の交配用オスとなり得るのだから、その様なオスには特別な報償や奨励を与えるべきであって、イエローカードにグレード分けしてしまうのはどんなものだろう。（遺伝子上の資質によって、グレードをレッド・ブルー・イエロー・ホワイトと区分けしている）こ

これは実際、4本角のヘブリディーン・シープが消滅しつつあることから事の深刻さが分かると思う。只ヘブリディーンの場合、オリジナルの島で見ることができなくなっていることや歴史的背景が稀薄なことから、もっと深刻であるかもしれないが。

無人島という特殊な環境において、野生になってしまったソーエイ・シープは、また違う問題をかかえている。島に於いて、彼等のカラーは2/3 がダーク・ブラウン、1/3 が淡黄茶色であり、メスは50/50 の割合で無角と有角であるにもかかわらず、長い歳月をかけ『ダーク・ブラウン』と『有角』が人間の個人的好みによって選択されてきた。そしていつの間にか、通常メスは有角であるといわれるようになっていく。

この様な問題点からも、トラストは遺伝子保護において正しい均衡を保つよう何等かの手段を講じなくてはならない。」

そして更に11月、P. ウェダーマーチン氏（『マックス・ロフタン物語』の著者であり、前マックス・ロフタン・ブリーダーズ・グループの代表）がそれに関連した興味深い実例を『アーク』に発表しています。要約しますと

「P. ジューエル教授の記事は遺伝子保護問題、とりわけ原種の羊を飼育してきた我々が、何世紀に亘って種を選択してきた、その影響についての示唆に富んだものであった。そして私が5月にマン島を訪れた時、目にし、感じた直接の問題点がここに現れているように思えた。私は滞在中3つのフロックを見ることができた。

1つはマックス・ミュージアムのものであり、そこではメスの1/3 が4本角、2/3 が2本角であった。飼育者は種の特長について自分の見解を押し付けることは正しいことではないと考え、明らかに病弱な羊はともかく「欠点」と称して淘汰したりせず、厳しいコンディションの中、小さなシェルターのみで崖の上、自然の進化に委ねてきた。何世紀もの間、ここではこのようにして自然が羊を淘汰してきた。原種の保護に関して、このような方法が最も純粋な形状を維持していけるのではないかと私には思われた。

2つ目は、ある村のミュージアムのフロックで、ここでは最近マネージャーが、より良い管理を目指し大幅な頭数削減を行った。その結果メス27頭が4本角、2頭が2本角というフロックとなった。ここで明らかなのはマックス・ミュージアムとは異なり、ロフタンは4本角でなければならぬという方針を打ち出していることである。フロックのコンディションはマックス・ミュージアムのそれより明らかに良好であり、牧草地は春に新しい種が播かれたことははっきりしていた。



3つ目は、無人島カーフのフロックである。ここも村のミュージアムと同じように最近選別が行われ、問題となっていた『キャスルミルク紋様』（過去にキャスルミルク・ムーリットが掛け合わされたことがある）もすべて取り除かれ均一性の高い展示品として整ったものとなっていた。この紋様は歴史的証拠として貴重なものであったが、種にとっては邪魔なものであったから、取り去ることは確かに正しい方針であった。村のミュージアムにしても、カーフ島にしても今や腕の確かなスタッフを得ることができたのである。

それにもかかわらず、私は遺伝子保護に関して良い状態で維持されているのはマンクス・ミュージアムだという思いを断ち切ることができない。狭義的な容姿・描写で種を淘汰するのではなく、広義的なパラメーターを根底として、長い期間に亘り種の遺伝子多様性を維持することができた。

一方ロフトンが、これから先『経済家畜』として歩むことを拒否することはできない。そしてその時、長い間改善されずに維持されてきたマンクス・ミュージアムのフロックは、残されてきた古代種としての特性や、種の多様性ゆえに、将来英国の飼育者たちに必要とされ、貴重な遺伝子資源となるだろう。」

最後に、私が最近訪れた英国の牧場を紹介します。そこは退職した人が趣味でレア・シープを10種類程 2~30頭づつ飼育しています。英国といえどもこの様に大規模な『ホビー』で羊を飼っている人はそういません。管理の行き届いた、整った牧場風景はそれは見事です。でも、何となく退屈になってきました。感覚でとらえれば、整い過ぎているということでしょうか。例えばソーエイです。皆同じダーク・ブラウンですし、ノース・ローノルドセイは驚くべきことにグレイはグレイ、ブラウンはブラウンとフロック分けして飼育しているのです。そのオリジナルな島ではグレイ、ブラック、ブラウン、白とミックスされてそれは美しかったのにです。マンクス・ロフトンも同じです。見事なまでに一色に染め上げられています。いくらロフトンカラーは一色だとはいえ、微妙な色合いがあり、糸使いの人間にはそこがたまらなく楽しいのにです。飼育している人は『レア・シープがはっきりした形であるのを見るのが楽しい』と私の疑問に答えてくれました。

今年のショウ&セールではここのグレイのノース・ローノルドセイのオスがリザーブ・チャンピオンになりました。もしかしたら毎年ここからチャンピオンが生まれるかもしれないと思うほど、羊の状態は素晴らしく、かつ皆同じです。

レア・ブリードの遺伝子を偏りなく維持していくという事。皆さんどのように考えられますか？

## 自 己 紹 介

### ◆赤木 勝江◆

私の住む所は、岡山県のほぼ中央、晴れた日には裏の畑から瀬戸内海が見える高原です。家族は、主人・子供3人・父・母・祖母の8人です。仕事は酪農で、現在牛が80頭います。その他に田舎暮らしをエンジョイするために、サフォーク7頭アンゴラ山羊3頭、鶏10羽、烏骨鶏20羽、蜜蜂がいます。入会したのは、小岩井農場での毛刈りの講習会がきっかけです。手紡ぎを始めたのですが、仕事が忙しくて思うようにできません。よろしくお祈りします。

### ◆品川悠紀子◆

私が「織」と出会ったのはずいぶん昔の話です。その間休んでは手を動かし、どちらかと言えば雑事に気をとられていた方が多い状態で、今日までそうして続けながら過ごしています。最初は糸と糸との交差で形になって行く面白さに引かれ、それから自分だけの糸を創る事に引かれ、そんな時「羊」と出会いました。ただ「羊」を観ていると心の中がホンワカ温まってゆく。それしか理由はないのです。「羊」がその昔、丘を歩き、船で他所の国へ運ばれて行ったその風景を想い浮かべていた時、帆船に乗る機会があり、その帆船がマン島に寄ると聞き参加したのでした。残念な事に天候と日程の関係でマン島には寄れませんでした。英国で2～3匹の羊をペットのように飼い、家族のためだけに糸を紡ぐ生活を知り、いつかはいつかはと夢みている私です。未だ紡ぐ時間がなくてアチコチ寄り道している私ですが、今は我が家の2匹の羊（レア・シープに近い）番人で我慢しています。「羊」にシロウトな私はこの会報に目を見張ることばかりですが、研究会に参加させていただいて嬉しく思っております。今後ともよろしく。

### ◆庄司 昭夫◆

「よりよい食生活の提案と具体化」を使命に、レストランをチェーン展開しています。世界の様々な食材や商品を求めて旅することが多いので、まずは羊料理について一言。日本人は羊肉は臭いからと嫌がる方も多いのですがパリなどの裏町には羊料理の店がいっぱい並んでいます。羊の臭いは実は毛皮の臭いです。羊は自分を主張する為に自分の尿を身体にかけそれが肉に移るのですが、肉の管理をキチンとすれば臭いは解決できると言われていました。シルクロードで食べた羊肉にはいやな臭いはありませんでしたし、カザフで食べた羊の臀部の脂料理も美味でした。写真は解体の場面です。臀部の脂肪がボールのように見えます。皆様からの珍しい羊料理の情報もお待ちしています。





誌  
上  
ギ  
ャ  
ラ  
リ  
ー

●堀内 眞里

「ツイードのジャケットを着たい。それも、自分で紡いで織った生地で作ったもので、身に着けると寒風の中でも疲労困憊している時でも居心地のよい部屋にいるような気分になさしてくれるような……」 何かきくと漠然と思いつけていました。ある日、経糸の紡ぎ・織りは私、緯糸の紡ぎは山本街子さん、仕立ては佐藤しおりさんの3人がかりではありましたが、実現することになりました。私の場合、梳毛で経糸を紡ぎ出してみると太さと撚りのかげんがなかなかつかめず、その不安定さが双糸にした時ますます増長されるありさまでした。リズムカルな音を立てて楽しそうに紡毛の緯糸を紡いでいた山本さんとは対照的でした。織りの段階でも打ち込みが平均せず疎密ができてしまうし、最後まで基準をつかむことができず、迷いっぱなしの作業の連続でした。毛洗いに始まってカードかけ・紡ぎ・織り・縮絨と各工程で百瀬さんの丁寧な指導を受けることができ、やっと何とか服地ができあがりました。仮縫いを経て仕立て上がったジャケットに袖を通すと、想像以上に軽くて暖かいのには驚きました。

●佐藤しおり

ホームスピンの生地を縫いたくて始めた洋裁でしたので、この仕事のできた感激はひとしおでした。これからも縫っていきたいので、皆様の注文お待ちしております

●杉綾織り

●経糸 ハードウィック (焦げ茶) 梳毛双糸640g ●緯糸 (グレー) 紡毛双糸500g

●仕上がり 75cm (幅) × 480cm (丈) ●箄 18/1寸

## フェルト制作についての報告

下山里香子

マンクスのフリースをフェルトするにあたって、皆さんに呼びかけたところ8名（大倉さん、澤口さん、田中さん、三上さん、三森さん、山本実紀さん、吉田さん夫妻）の方から楽しい力作が寄せられました。

11月6日、マンクスのフリースと皆さんからの作品を並べて具体的な制作について話し合いました。出席した会員（工藤、佐藤、下山、堀内、三森、百瀬、山本街子、吉田）からいろいろアイデアが出された結果、フリースの表はそのままの状態に残し、裏側に皆さんからの作品をくっつけてフェルトさせるという大胆かつ画期的なものに仕上げることになりました。12月4日には、会員の松本さんも新たに加わってフリースの毛洗い・下地用ウールのカードかけ・道具作りを手分けして行ないました。イギリスでフェルトを学んできた百瀬さんの指導の下に、いよいよ来年1月にフェルト制作です。参加したい方、フェルトに興味のある方はお知らせください。作品もまだ募集中ですので、1月半ばまでにお送りください。

### ★フェルトメイキング&立食パーティー

時……1994年1月29日（土）11時～5時（雨天中止）

場所……研究会事務局（神奈川県鎌倉市大船6-10-58）

持ち物……長靴・厚手ソックス・厚手ゴム手袋・その他差し入れ大歓迎

問い合わせ先……下山里香子 〒214 神奈川県川崎市多摩区生田 7-25-3-102

Tel. 044-932-7303

~~~~~ 作品を寄せられた皆さんのお便り紹介 ~~~~~

（北海道江別市 澤口弘子さん）  
江別では雪虫がとんでいてもうすぐ冬です。紅葉はそろそろおしまい。冬囲いのシーズンです。元気なのは子供と犬だけで、私は冬眠の用意をしています。

（愛知県瀬戸市 三上千晶さん）  
朝夕寒くなって羊のぬくもりが恋しい季節になりました。糸を引く毎日です。マンクスのバージンウールを糸にしあげ、さて何にしようか思案中です。

（北海道池田町 田中黎子さん）  
霜が真っ白に降りてそろそろ羊の草も乾草にしなければならなくなりました。来年イギリスでフェルトの作品を見ることを想像してわくわくしています。

（大阪市 大倉真実さん）  
フェルト作りに初挑戦しましたが、自分の思う通りの形やデザインに作るのは意外と難しいですね。何度も作っていかないと感覚がつかめないのかな。

では、皆さん、羊さん、メリークリスマス&よいお正月を！！

## 羊と共に生きる

高橋 徳行

私事で恐縮であるが、私の仕事は現在、牛飼いと、羊飼いの手伝いをしている『農民になれない』サラリーマン稼業という宮使いなのである。住宅も農場内の社宅住まいであり、仕住一体の日常生活は農家と変わらないと思っている。いつもは、朝、目が覚めると、我家の愛犬ロッキーに催促されながら、散歩がてら放牧地を、2、30分で一回りする。距離にして約3.5Km～4Kmである。それから朝風呂を浴びて、朝食を済ましての出勤となる。

今朝(11月20日)の散歩での見回り時、放牧地で羊が生まれていた。

この母羊は2月7日に♀を分娩している。今月はこれで3頭目だ。11月13日に♂を生んだ母羊は、2月9日にやはり♂を分娩しているから、分娩間隔 227日目のお産となる。

この予定外の分娩は、まだ続きそうであるが、飼育係りは不思議だ?という。しかし、話をよくよく聞いてみると、犯人?は、この春生まれた子羊であった。1頭だけ離乳前に、販売予約の去勢されていない子羊が、紛れ込んでいたという訳だ。この子羊は6月30日に放牧地より引き上げられているのに!こんなこともあるんですかと、信じられないという顔で尋ねてきた。若い羊飼いは、このような体験を一つ一つ積んで育っていくのである。私も小岩井農場に入社した頃、先輩から“家畜とは何か”と問われ、繁殖をコントロールできないものは、畜産人として失格だぞ!と言われたことが思い出される。

さて、わが愛犬ロッキーは、小岩井の名犬といわれたシュラー(ボーダーコリー犬)の、曾孫の子供となるが、ボーダーと日本犬のハーフと、ドーベルマンとの子供である。いささか込み入った雑種犬ではあるが、名犬シュラーによく似ている。このシュラーという犬は、羊は元より、牛も上手に誘導し、酪農事業に貢献したことから、立派な墓標が立てられている。事務所には大きな額に入れられた写真が飾られてもある。

その小岩井の名犬シュラーの子供達は、全国に引き取られていったものであるが、残念ながら後継犬は小岩井に残らなかった。この犬の親は、元農林省岩手種畜牧場の豊田場長さんがニュージーランドから連れてきたものだと言っている。私とそのシュラーを引き取りに岩手種畜牧場にいった日のことを、なぜか、今でも昨日のごとく記憶している。シュラーは、「兄弟の中でも一番小さかったため、払い下げの予約も最後になっている」と係りの人が、申し訳なさそうに話されたが、私には、動きもよく、ハングリーさがあり、一番気に入った子犬であった。そして喜び勇んで連れて帰ったものである。

そんなことから私は特に羊にこだわっている訳ではないが、家庭に帰ってからも羊との拘りから縁が切れそうにもない。毎日羊を見て暮らしているものの、いまだに羊のことはよく分からないのである。『何か羊の話しても』と、人に言われることがあるが、どうしてそんなに羊のことが気になるのであろうか。本当にあの人は羊が好きなのかな。羊の何が知りたいのかな。と。ヒツジという響きのある言葉のもつ、不思議な動物の魔力、そしてその魅力に、戸惑うばかりである。だから羊飼いは、羊の鳴き声のごとき、それぞれメェメェ(迷々)勝手な思いで飼っているのだ。正に多岐亡羊といったところである。しかし、これからは本当に美しいもの、文化的でグローバルなものが求められるでしょう。

## 家畜羊の祖先を探る (下) 家畜化による外貌上の変化

正田 陽一

現在の改良の進んだ家畜羊と原種となった野生羊とでは、外貌の上でずいぶん違っている。

●毛 ヒツジの学名(Ovis)が、インド・ゲルマン語のUvere(覆う・着る)という単語に由来していることにも示されるように、家畜羊の主要な生産物の一つは羊毛である。メリノ種を代表とする毛用種の全身を覆って1年中のびつづけるウール(wool)は、野生羊には見られない特徴である。野生羊では冬季ヘア(hair)の下に短いウールが生えるが、夏には小さな塊となって脱け落ちてしまう。この冬毛の塊は、ウールと少量のヘアがからまっていて利用価値の低いものなので、羊の家畜化が最初から毛を目的に行われたとは考えられない。他の家畜と同じように肉を目的に馴化されたヒツジが、その中に乳の利用、毛の利用と多目的に活用されるようになり、ウールの生産に適した毛用種が作りだされたのだろう。植物繊維の利用のさかんな熱帯地方の家畜羊は今でもヘアのまま、ウールはほとんどない。

●尾 野生羊の尾はウリアル以外は皆短尾だが、家畜羊は程度の差はあれ皆長尾である。毛用種では後軀の毛を糞尿で汚さぬように、この尾を生後1週間ぐらいで断尾している。また、脂尾羊のように長い太い尾に脂肪の蓄積した家畜羊もいる。脂肪尾の形もいろいろあって、中程度の長さの尾の先端は彎曲して上を向き、尾根部の左右に大きな脂肪の瘤がついたものもある。脂尾羊は紀元前2500年のメソポタミアのウル王朝時代の彫刻にも見られるので、かなり古いものである。

●耳 家畜羊の中には耳朵が大きく発達して垂れ下がっているものがある。特にアフリカの品種に多く見られるが、これは体温の放散に役立っている変化でインドのウシやヤギに見られる変化と同じ理由による。

●角 野生羊の角は大小の差はあるが、いずれもうずまき型にまいた角である。しかし、家畜羊では管理上大きい角は危険なので、除かれる方向へ育種された。そのためサウスダウン(Southdown)のようにオス・メスとも角の無い品種がたくさん作られている。またドーセット・ホーン種(Dorset Horn)のようにオス・メスとも有角の品種もあるが、野生羊とは違って角の方向が基部で上方へ向かっていない。これは角の基部が弱いために、角が始めから側下方へ向いて巻いてしまうからである。角の形は曲線方向へののびと、長軸方向への縦ののびの両方で決定される。前者が大きければ完全にうずまき型の角となり(ムフロン・ウリアル)、後者が大きくなると、アルガリに見られるような長く開いたらせん角になる。そして、後者の

のびがさらに大きくなるとザッカル種のような杖状のらせん角になる。家畜羊の中にはヤギ型の角を持つものや、4本の角を持つ品種もある。ヤコブ種(Jacob)はムフロンの流れをくむヒツジだが、頭にはりっぱな4本の角を持っている。

●体格・体型 野生羊には山岳地帯を移動して採食するものが多く、そのため四肢は長く身のこなしも軽快である。家畜羊でも不毛地帯に飼われている品種には、広く餌をあさって歩く必要から長脚のものが普通に見られるが、ヨーロッパの改良種は一般に短脚で運動性も活発でなく高い所へ登るのも苦手である。家畜羊を飼育するのに柵を跳び越えられては困るので、脚は短い方が好都合である。そこで1791年に突然変異で生まれた脚の短いヒツジを遺伝的に固定して、アンコン種(Ancon)という品種も作られた。しかしこの品種は実用性が低かったため、19世紀の末に絶滅して現在は残っていない。体の大きさは野生羊より変異がずっと大きくなっている。シェトランド島の小型品種は体高45cmぐらいしかないが、カメルーンの長脚の品種では体高100cm以上のものまでいる。

このような同一種とは思えないほど体系・体格の著しい変異は、家畜化に伴ってどの動物にも見られる現象である。これは野生動物では自然淘汰の圧力が同一種の変異を小さくする方向に、言い換えれば恒常性を保つように作用するのに対し、家畜化されると自然淘汰が減り、人為淘汰の力が加えられることによって、飼養目的や飼養環境の差から別々の異なった方向へ改良が進められて変異が増大することになる。(終わり)

(どうぶつと動物園 1979年2月号より転載)



サウスダウン種  
Southdown.



ドーセットホーン種  
Dorset Horn.



ヤコブ種  
Jacob

内藤原図

## 前号での『提案』に対する手紙と電話

### \*武藤浩史さんの手紙から（抜粋）

「なかなかレア・シープの活動に実質的参加ができないのが現状です。研究会活動費の使い道については、ダイモン氏が羊全般に精通されていらっしゃる方でしたならば、是非マンクスのみでなく我々意欲的羊飼いのところにも足を運んでいただいてご指導をいただき、意見交換をする機会があれば有り難いです。綿羊協会や、肉用家畜協会の協力も得られればと思います。綿羊飼育現場数箇所で勉強会など開いたらどうでしょうか。

現在、日本の羊を取り巻く現状下では、以前私が申しておりましたとおり羊全体が守るべき家畜といった具合になってきております。ここ二年の間に頭数も約2.7万頭に減りました。今となっては大きな販路の拡大や、羊毛の小規模加工場など考えるよりも羊飼いや国産羊肉、羊毛を愛する利用者一人々々の意識の問題で、それでも羊を飼い続け、国産にこだわるのはなぜなのか、他人がどうあれ自分の考えを明確にし、自分の価値観で目的に向かい手段を講じることだと思っています。もちろん仲間同志の協力は今まで以上に必要です。」

### \*戸荻哲郎さんの電話から（要約）

T：やるならじっくり時間を掛け本腰で取り組まないと。マンクスを飼っている人達の意見は出ているの？

M：出てないけれど、この提案はマンクスの人達だけとは考えてないの。羊を飼っていて、希望する人達の牧場はコンサルトしてもらおうと考えるわけ。

T：マンクスの人達だけでないのは賛成。でもダイモンさんは日本のマンクスがどうなっているかまず見たいと思う。順位としては、まずマンクスの牧場。そのためにもマンクスを飼っている牧場1カ所でも、飼育者が問題点を認識できることが必要。最低でもそのぐらいの準備のないところに呼んでも困るよね。

M：基本的にこの提案に賛成？反対？それだけのお金の使い道として他に何かアイデアある？

T：基本的には賛成。1回きりのことではないし、またお金ができれば他の案を考えればいいと思う。でも経済的にはどうなの？

M：具体的に出ているわけではないけれど、アドバイスを受けた牧場がその日の一宿一膳を用意してくれればと思っている。

T：ことを大袈裟にしないで、研究会としてできる範囲で自分たちの事として進めるのはいいと思う。でもせっかく羊に詳しい人が来られるのだから、綿羊協会や肉用家畜協会にも働き掛けて、研究会とは別個に勉強会など企画してもらうのもいいのでは。

\*他にも多くのご意見（手紙、電話）お待ちしております。ヨロシク 百瀬正香



## トピックス

### なんと1フリース19キロ!!

今年 7月24日イギリス、リンカーンシャーでリンカーン・ロングウールのショーが行われ1番重いフリースを競いあった。2人のシェアラーが21頭の羊を刈り採っていったが、あまりに大きな羊ばかりで、正当な方法で毛刈りができず、何頭かは気儘に横に寝かしながらの毛刈りとなり皆大いに沸いた。優勝羊はジャック。当年2才のオスでそのフリースは19キロ。彼には双子の兄弟がおり、そのジュリアスは6月の終りに毛刈りをし、その時のフリースが18.5キロ、合わせて37.5キロと信じられない記録を出した。ちなみに前回の記録は1991年で17.5キロ。世界の記録は21キロと言う。ステーブルの1番長かったのはメスのヴァージン・フリースの81センチ。 (アーク9月号)

リンカーン・ロングウール種は産毛量が多くステーブルが長いとはいえ、平均7-10キロ、15-35センチといわれている。もちろん彼等はレア・シープ。

### ●新会員紹介

金指 歳 〒431-38 静岡県磐田郡竜山村大嶺1371-1 TEL.0539-69-0152

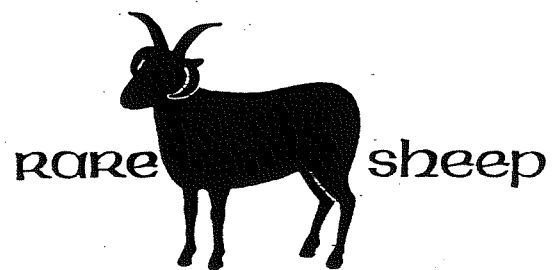
### ●訂正

レターズ5号の「羊のティータイム」のタイトル『the shepherd's hat』をhutと訂正いたします。

●93年度分の会費未納の方は、早急に振り込んで下さいますようお願いいたします。退会される方は、ご連絡下さい。

## 編 集 後 記

好評だった正出陽一先生の「家畜羊の祖先を探る」は今回で終了しました。次はレア・シープについての新シリーズを検討中ですし、工藤悟さんの「羊飼いの犬」の続編も期待したいところです。イギリスの作家であり獣医でもある、ジェイムズ・ヘリオットの本を愛読している松本由里子さんが彼の本の魅力を語ってくれる予定です。では、皆さん、よいお年を！ (小国 徹)



1993年12月発行 第6号 (年3回発行)

編集・発行●レア・シープ研究会 百瀬正香

〒247 神奈川県鎌倉市大船6-10-58

Tel. Fax. 0467-47-5516